慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フランス革命と民衆運動 : 其指導者とその性質
Sub Title	
Author	小泉, 順三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1933
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.27, No.5 (1933. 5) ,p.733(75)- 753(95)
JaLC DOI	10.14991/001.19330501-0075
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19330501-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

註一〇一　Gottl; a. a. O. S. 35

註一〇二　Gottl; a. a. O. S. 35.

正にシュトレラーの說く如く『欲求の重壓』と『生活に必要なるもの』の認識との二つの考慮が經濟者を驅り動す。而して之はか『主觀的價値評定と異るものであるか、之は舊き概念に對する新しき名稱、古き酒に對する新しき嚢に過ぎぬものではないか。『欲求の重壓』といふ用語と『價値』といふ用語との間に或區別を確定することは不可能である。兩者は同一の概念である。其意味する內容は、經濟者が先づ第一に、最も强く妥當する所の欲望を滿足させるといふことである。經濟者が一定の欲望滿足手段をより高く評價すると言はうが、欲求はより大なる重壓を持つと言はうが、唯單に表現方法の問題にすぎぬ」（註一〇三）

註一〇三　Streller; a. a. O. S. 34-5.

最後に吾々は結論として左の如く言ふことが出來る。經濟的ディメンジョンは、論理的に矛盾せる概念である。一方に於て論爭の當の相手の概念を曲解し、他方、自らは存在し得ざる概念を存在せる如く想定して獨り相手を取つたのがゴットルのディメンジョン論である。經濟的ディメンジョンに固執する限りゴットルの價値價格論は不完全であるが、之から離れて限界效用說に類似せる說明を爲す點に於ては、經濟的ディメンジョンの缺點を補へる觀がある。此事は結局ゴットルの經濟的ディメンジョン論が「在來」の科學を無視し、「從來の」理論を輕蔑して學問上のロビンソー・クルーソーを演ぜんと欲したことに存するものであらうと。

附記　ディメンジョン（Dimension）なる言葉をば譯せず其儘使用したのは、之を强ひて「擴がり」とか「大さ」とか或は「次元」など丶譯して著者の意味せんと欲する所の本來の語義に曖昧を與へることを恐れたからである。

フランス革命と民衆運動

——其指導者とその性質——

小泉順三

一

大なる社會變革は常に騷亂と不秩序を生むものである。而して熱に浮かされた民衆はこの雰圍氣の中にあつて、狂奔と破壞と叫喚を好むものである。

我々はフランス革命史を繙く時、屢々狂激なる民衆の行動を眼前に彷彿せしめる。我々は民衆の直接行動を見る時、そこに行はれる破壞を思ふ時、財產に對する革命的民衆の無意識か、或は、有意識的な攻擊の存在を肯定する傾向をもつ。この理由に依つて、民衆の一族に於て、フランス革命は社會主義的實行力の何者かを所有してゐなかつたかと考へて見る事も出來る。然し、リシュテンベルヂエは其名著「社會主義とフランス革命」に於て、この種の見解を否定して、「それは社會主義或は民衆心理の根本的原理に奇妙な誤解をしてゐると云はねばならぬ。掠奪のあらゆる行動は、社會的に所有權回復の一行動ではなく、意識的理論から出發しない場合の個人的衝動である。一片の骨を盜む犬が社會主義者でない樣に、一片のパンを盜む飢えたる者も社會主義者でない」と云つてゐる。（Andre Lichtenberger, Le So.ialisme et la Revolution française p. 88）

民衆の暴動には、彼の云ふが如く、社會主義の痕跡はないのであらうか。

二

フランス革命の進行中に於て、暴動或は一揆を作成したものは、殆んど全く、飢饉、貧困、憤怒、缺乏等であつた事は確實である。

農民及都市の民衆の生活狀態は、些少の凶作でも、都市のパンの價格の騰貴と、農村の飢饉とを惹起する程に惡化し、それが常に暴動の原因をなして居つたのである。その要求がパンの價格の一定、小麥の價格の引下、小麥の掠奪、封建的諸稅の強制的撤廢、土地臺帳の燒却、穀物の強制徵收等何れの表現形式をとつたにせよ、最初に於ては、パンの問題が主要動機であつて、それ以上何者でもなかつたのである。

然し、それに、やがて、經濟狀態及政治組織に關する要求、即ち民衆の目的意識的要素が附加されて來たのが認められる。

然らば、當時、この意識的要求は如何なる內容をもつて居つたか。

三

當時、農村にもヴルテールが讀まれ、「第三階級とは何ぞや」を讀み且考へる者はあつた。又「假令、楷書にせよ兎に角、讀み書きの出來る織匠や左官も居つた」。農民達は三民議會の召集に際して、大急ぎで彼等の苦情を陳情書に載せることも出來た。彼等は、長い間盲目的服從に咀縛されて居つた彼等の財產を、封建的呪文から解放したいと考へて、それを陳情書に書いた。これらの要求に關して、有識ブルジョアジーが革命思想を彼等に傳播した事は事實である。ブルジョアジーが、彼等を「平和なる叛徒」ならしめやうとしたに對して、革命的民衆は、直接的革命的方策を彼等に授けやうとした。「既に農民の間には秘密結社がつくられて居た。そして、名も知られない人物が影の如くに徘徊して一錢も租稅を支拂ふな。租稅は貴族に支拂はせよと訴へてゐた。又貴族は既に租稅の支拂ひに同意したが、これは彼等の常套とする奸策にすぎないなどと云ひ觸らして廻る者もあつた」。

然し、要するところ、農民は彼等の欲するものを極めてよく知つて居つた。彼等は何を欲して居つたのか。

「町村團體から奪はれた土地は返還して貰はねばならぬ。封建制度から生れたすべての負擔は消滅しなければならぬ。凡そ富民はすべて掃蕩されねばならぬと云ふ考が漸次滲透して居つた樣である。

尤も、買占者を殺せと叫んだ人々も富者としてではなく、貴族主義者として、又民衆の敵として、資本家を懲罰しやうとしたのである。從つて、彼等が往々にして個人的侵害を行つた場合もあるが、それは大低、飢饉を種に金を儲けた投機師を目されるものが、そう云ふ目に合つたので、領主の生命自躰に關する侵害の如きは、殆んど偶發的と云つてよかつたのである。人間に對する暴力を自制した一切の封建制度の暴力的破壞、これが彼等の行つたものである。

かくの如くであるから、農村の人々及都市の人々ですら、社會主義的理論には全く未知の人々であつたらしい。

新らしい觀念は、日日の擾亂と尖銳化した困苦の時代に於ては、殆んど民衆の胸中に活躍し得なかつた。擾亂者の奇怪な揚言に從つたのは、たゞ人間の本能的なものが然らしめたに過ぎなかつたのである。村落及都市に於ける暴動は大なる範圍に亙るものであつて、クロポトキンの云ふ如く、「假令、かの七月十四日にパリーの民衆が打敗られてゐたとしても、農村を一七八九年一月以前の狀態に戻す事は最早不可能であつたろう」と思はれる程、民心の激昂は熾烈であつたが、それは、何等創始的のものではなく、一大政治運動には、常に分離することの出來ぬそれ

と同様のものであつたと思はれるのである。

四

從つて、暴動は、全くブルジョアジーの利用する所となつたと云つてよかつた。ブルジョアジーは、これを利用して封建思想に浸み透つてゐる舊市政機關を廢棄し、民主的基礎の上に選出された新市政機關を樹立した。そして同時に、彼等は都市の下層民と農村の土匪の蜂起の結果惹起した恐怖を利用して、自己の武裝を整えるため、都市衞兵なるものを組織するのに、成功した。然る後、彼等は、秩序の回復のために暴動の擊滅に着手した。農村に迄この手段が行はれ、各所に蜂起した農民の指導者を絞刑に處したのである。しかも、この中には、八月四日の封建的束縛の廢止を無條件徹廢と思ひ誤つて事物を占有した、善良なる農民達も少くなかつたのである。（Kropotkin, p. cit., p. 127）

マラーはこの間の事情を觀破して次の如く述べてゐる。「平民即ち、下層階級のみで上層階級に對して鬪爭する時、革命は決して成功しない。暴動の瞬間には、平民は、その團結によつてよく壓倒する。然し、最初にどれ程の優勢さを見せても、最後は常に壓倒されて了ふ。何故ならば、常に知識と藝術と富と武器と指導者と行動の計畫とを持たない彼等は、巧智と狡猾と技巧とに滿ちた陰謀者に對しては、防衞の方法がないからである。若し、教養あり、生活が豐かで而も下層階級の密謀者たる人々が、專制君主に叛いて最初立つたとしても、それは、彼等が追放した特權階級の場所に自ら座らんがために信用を充分につけ、自分の勢力を用ひた後は、たゞ民衆に叛くために過ぎなかつた。かくの如く、革命は社會の最下級階級によつて、勞働者によつて、職工によつて、小賣商人によつて、農夫によつて、無禮な有產者に賤民と呼ばれ、ローマ人的傲慢な人々に無產者と呼ばれるところの不幸な人々によつてのみ行はれ、且つ支持されたのである。然し、人の一向思ひも及ばぬ事、それは革命が小地主、法律家、裁判官の手先等の利益になるやうにのみ行はれたことである」と。（J. Jaurès, Histoire socialiste de la Revolution française. Tom 4. p. 331.）

結局、我々は暴動に純粹の社會主義的素質を認むべきでないのであるが、民衆が、意識的にせよ、無意識的にせよ、彼等の團結した直接行動によつて、常に革命を有利に導いた事、具躰的に云へば、自由と平等とを同時に實現しやうとした事は特に注目すべきである。しかも、それは何人によつても、指揮されぬ事、換言すれば、所謂革命の指導者であるダントン、マラー等に指圖されたのではなかつたに於ておやである。ジョレスの表現に從へば、革命は議會とパリーの民衆と云ふ二つの併立する火壇を有して居つたのである。（J. Jaurès, op. cit., Tom I. p. 306）

革命の進行中、相繼いで起つた暴動と擾亂を考察して、そこに現れた民衆の意向を見やう。

五

革命に於ける民衆の蜂起として、我々は、レヴイヨン事件を初めとして、バスチーユの占領、ヴルサイユへの進擊、チユイラリーへの亂入、最後にジロンド黨潰滅のための暴動等々を擧げる事が出來る。

偖て、革命に於ける最初の事件としては、レヴイヨン事件を擧げるべきであろう。

彼は、フオーブール、サン・タントアーヌの非常に富んだ商人であつたからして、これは有產階級と無產階級との最初の對抗を示してゐるやうに見えた。

一七八九年四月二十七日、レヴイヨンが選擧人會に於て、給料は十五ソウでしかあつてならないと要求したと云ふ噂が擴がつた。然るに、この要求額はパンの價と同一であつたからして、勞働者にとつては、正しく飢えを意

味するに等しかつた。そこで、石を携へた威嚇の一隊が、彼の窓下に押寄せて彼の肖像を燒き、倉庫を襲ひ、掠奪した。だが、兵士はこれに銃火を浴せ、强盜として彼等を絞首臺に上せた。

クロポトキンは、この事件に就いて、中等階級と勞働者達との間に不一致があつたらしいと云つてゐる。然し、彼も亦云ふが如く、この事件は噂に起因してゐるし、又その動搖の眞の意味も分明でない。これに對しては、他の生産者が競爭者に對する憎み、或は、强盜の仕業、或は反革命、朝廷の煽動に依る三民議會の選擧に對する企圖等と、種々なる原因が臆測されてゐる丈、階級鬪爭とは考へられないのである。

「フォーブール、サン・タントアーヌさへも、この悼ましい挿話を速かに忘れて了つた。如何なる影も七月の光輝ある革命騷亂の上に、これらの絞首臺の上から射しては來なかつた。かくの如きが、革命の歴史的力であり、この時代にはかくの如きが最高の合理性であつたから、有産者と無産者が、共にバスチーユの攻擊に上つて行き、有産者レヴイヨンのために流された血が、不一致の標とも、邪魔な記憶ともならなかつた」とジョレスは云つてゐる。(ibid, p. 143)

この四月廿四日から二十八日迄の數日は又、七月十一日から十四日迄の數日の前觸れとも見えた。バスチーユの占領、何人が何故に人々の注意をここへ向けさせたかは詮議すべき事かも知れぬ。然し、これは不可能でなく、不可解である。ミシュレは云ふ、曙光と共に一つの考へ「バスチーユへ」がパリーの人々の頭に浮んだ。そして、すべての人々が同じ希望の光で輝いた。……それは不可能な「不合理な、奇怪至極な事であつた。しかも、各人はそれを信じた」と。(Michlet, French Revolution, translated by C. Cocks. p. 143)

何人もこの擧には衝動を與へてゐなかつた。パレー、ロワイアールの論客連は、ポリニヤック夫人、アルトア、フレッセル其他、並に王后を死罪に處す問責表を作るに時を過しつゝあつた。バスチーユの征服者の名には、從つて、これらの動議製作者のそれを一人も含んでゐない。このパレー、ロワイヤールは、暴動の出發地でなかつたし、征服者等が掠奪品と囚人とを連れ歸つたところでもなかつた。況んや、市廳に集つて居つた選擧人會が、かゝる意圖を持つ筈はなかつた。反つて、彼等はこれらを防ぐ意思を有して居つたのである。

然らば何人がこの信念に忠實であり、實行を完成したのか。それは國民であつたと應ふべきであらう。クロポトキンは、バスチーユを占領すると云ふ事は、民衆の本能的知覺によるものと解すべきであらうと云つてゐる。(op. cit, p. 78) 殊に、當時バスチーユを破壞すべしと云ふ聲は、陳情書にも屢々現れて居つたし、又パリーの人民を粉碎する宮庭の計畫にはバスチーユが重要な地位と役割とを演ずべきものであると云ふ事は人々に餘りにも知られ過ぎた事實であつたのである。

バスチーユ占領のこの運動を指導したものは、小市民階級であり、勞働者の最も貧しい者が大部分、其實行上の義務を盡した。「バスチーユの前で殺された數百數千の戰士の中には、幾週間後には、其名も呼起されない程貧しい哀れな卑しい人々があつた。」そして、「城砦の殺人的火災の下に在つては、『能動的市民』と『受動的市民』との區別はなかつた。選擧人資格を得る丈の稅を拂はなかつたものさへ、共同の自由のために戰ひ、死ぬ事が許されてゐたのである」。(J. Jaurès, op. cit, Tom 1. p. 303)

そして、フォーブールの勞働者達が賃金の支拂を途絶されて居つたこの騷亂の三日間に、この所謂大衆の中には、立派な服裝をした多數の市民が參加して、痛ましいこの野蠻な行列の中で勝鬨をあげて居つたのである。そこに行はれた殺戮暴行に就いて、ジョレスは、バスチーユの占領には、有産者革命の殘忍非人情時代——舊制度の野蠻行

爲の傳統があつたと評してゐるが、バスチーユの勝利が如何に有產者的であつたかは、間もなく實證される時が來てゐる。それは、マルモンテルの慈善工場閉鎖事件である。この工場に働く一萬餘の人々が解雇されるに際して、大砲が引き出され、その脅威的な雰圍氣の中に於て行はれた。襤褸に包まれ、憔悴した顏の勞働者は、この脅威の下で二十四スウと旅券を貰つたのである。然るに、この大砲を曳いて來た人々は間誤なく、バスチーユの勝利者達であつた。ジョレスは云ふ、「革命がどの程度迄有產者的であつたかを、これ以上よく示すものはない。生命を賭して虐政からこの城砦を奪つた勇士等は、饑えたる無產者の血を流さしめる事によつて、その名譽を傷けるとは考へなかつた。當時の印畫は、有產者の大砲がマルモンテルへ向ふ『華々しい進行』を、バスチーユの占領と殆んど同樣に喜んで描き出してゐる」と（ibid, p. 356）。

とまれこの七月十四日は、革命的民衆の最初の勝利の日であり、「尙暗い背後に遠ざけられてゐた無產階級をば、少しづゝ活動の第一線に近づけたものであつた」。たとへ一瞬間とは云へ、彼等が有產者と伍して指導者の地位に上つた事は、無產者には、一資格であり、又未來への約束でもあつた。（ibid, p. 309）

次いで十月五日には、民衆の幸福に反する陰謀の孵化所と目されるヴルサイユへ、民衆、殊に婦人の群が進軍した。

この婦人達は、決して無賴賣春の徒でなく、「營養不良の小供の啼きに堪りかねた深い母性愛をもつ良き勇敢な婦人達であつた」と云はれてゐる。（ibid. p. 384）六月二十三日以前に事物を押戻さうとする宮廷の陰謀に對しては、實に、人民の蹶起以外にそれに勝る手段はなかつた。クロポトキンは云ふ、「最初ヴルサイユに入つて、疲勞と饑餓とに壓服され、ドシヤ降り雨にビショ濡れになつた女達は、パンを要請することで滿足した。彼等が議會に闖入した時、疲れ果てた彼等は、議員達のベンチに倒れて了つた。併し、それにも拘らず、彼等の現れたばかりで、既に彼等は最初の勝利を得た。議會は、この進軍によつて『人權の宣言』の裁可を獲得した」と。（Kropotokin, op. cit, pp. 155-156）これを換言すれば、新らしい人間性に、その輝かしい稱號、即ち、「人間の權利」を交附した者は、實に、パンを求めるパリーの手內職の婦人勞働者であつた。尤も、かくして得た「人間の權利」は、彼女や彼女の夫達のものでなくして、眞實は有產的市民のものであつたこと丈は遺憾である。

ジョレスはこの群衆について、次の如く巧みに其本質を我々に敎えてゐる。「これは粗暴狂亂の群衆ではない。…一瞬間議長の席を占領し、次いで大膽な、厚誼的な親しい調子で彼と語り、終ひに再び有產者議會にその自由行動を許さんがために群集の大激流の中に加つて行つた女達、これこそ、正しく革命の下に於ける民衆運動の姿である。貧民達は急激に進出し、突如として權力に近寄る。彼等は、この權力を訊問し、虐待し、時々之れを指導し、包圍した。しかも、彼等は、遂に、これを把握することを知らず、又出來なかつた」と（Jaurés, op. cit, p. 394）。

暴動は尙屢々起つた。何故ならば、それは革命を完成さすにまだ足りなかつたからである。

一七九二年六月二十日の民衆のチユイラリー進軍は、王權に對しては不成功であつた。然し、王の反革命的態度が民衆に明白になるや、彼等は最早決して疑惧しなかつた。バスチーユへ、ヴルサイユへ、最後にチユイラリーへ、このチユイラリーへ一大攻擊を加へることの觀念、舊支配はルイ十六世が王位にある間は、何時までもフランスに永久的脅威を殘すものであると云ふ觀念は、今や民衆の心を完全に把握して了つたのである。

一七九二年八月十日のチユイラリー攻擊がその具體化された事實であつた。クロポトキンの所謂「意見の首領」であるロベスピエール、ダントン及其門下がこれを了解するや否や、人民即ち無名の大人物達は、反亂に對する準

備を始めたのである。

この際「例の首領達は何處にどうして居つたか」。「そこには何ものもそれを指示すべきものがない」。これは、ルイ・ブランの問答である。實際、ロベスピエールは何もして居なかつた。ダントンは民衆の間を說き歩いて草疲れたのか、安らかに其夜は眠つて了つた。これは、恐らく、彼等の誰れもが、運動が決定された隙間から、政治家は必要ないことを呑込んで居つたためでもあらう。必要なものは、眞實、民衆の武器と武器の分配と、街上の保塞の築造であつた。八月十日の夜は、月光和やかに、眞夜中少し過ぎ迄は靜かな良夜であつた。この時には、路上には尙一人も殆んどなく、人影一つもなかつた。特にフォーブール、サン・タントアーヌは靜まり返つて居つた。人々は戰を待ちつゝ眠つて居つた」と、ミシュレは美しく筆を進めて當夜を畫いてゐる。（Michlet, Revolution française Tom IV. pp. 2-3）

この日、フォーブールの民衆は銃を執り大砲を曳いた。そして、この革命縱隊には諸所に赤旗が翻つた。

註　ジョレスはこゝに赤旗の歷史的起源を求めて次の如く書いてゐる。民衆は宮廷及溫和主義の徒黨に對して、祖國及自由の名に於て合法的彈壓の旗を飜したのである。從つて、この赤旗は、決して、シャンド・マルスの復讐の旗ではなかつた。「それは自己の權利を意識する新權力の輝かしい旗であつた。それ故この時以來、無產階級がその力及期待を斷言する時毎に赤旗が飜るであらう」。「赤旗が灰の下に永い間隱されてゐた焰の如く再び聳立つには八月十日の革命の口傳へが、半世紀の間、フォーブールの貧しい家に於て、父の口から倅の耳及心に續けられて居たに違ひない」。（J. Jaurès. op. cit, Tom 4, p. 141）

然し、この企も、決して、人の云ふ如く、賤民の寄合によつて實行されたのではない。眞の人民によつて、あらゆる階級によつて、パリー及地方の軍人、非軍人、勞働者及町人階級の人々が混交した集團によつて行はれた。パリーの多くの區は、除外なく、戰ひうる人にして彼等が有つすべての人を馳り出した。この結果、彼等が得たものは、王權の完全な停止であつた。

彼等は何よりも完全な政治的自由、民主主義を求めた。外國の王を遠ざけるため、裏切者の王を倒すため、チュイラリーから發し、コブレンツから山彥となつて歸つて來たブランスウイックの宣言を抹削するために立上つた。故に、八月十日も「無產階級を蜂起させたのは、明白な且直接の階級運動ではなかつた」。「勞働者の希望は、この光輝の裡に、共和國の勝利に結合されてゐた。」幾度か立上つた民衆は遂に王權を廢止するに至つたのである。

次いで五月三十一日と六月二日の叛亂は、八月十日以來斷えず會合しながらも、尙實行を躊躇して居つたダントン、マラー、ロベスピエールの輩によつてではなく、所謂無名の人々によつて行はれ、革命の進行を阻害するジロンド黨を完全に追除けて了ふ事が出來た。

かくして、無名の人々は、革命的コンミューンを組織し、支配し、民衆の眞中から常にコンベンションを左右し、革命の進行に對して嚴重な監視の眼を見張つたのである。その行ふところは、全く封建制度と封建君主の撤廢にすぎなかつたけれども、パリー市區の支配が中等階級ではなくして、下等社會の人々の手に落ちた事實は、無產階級としては特記すべき史實なのである。而して、この期の暴動が、後節に述べる如く、それより以前のそれと性質を異にし、依然として本質的にはブルジョア的であつたとしても、少くとも表面上、或は其動機として、生活の窮迫それ自體、或はそれを惹起したブルジョアの社會的活動に起因して居つた事も注目すべきである。

六

我々は、かゝる種類の民衆の指導者を、その反對黨ブリソーの命名を採用して「アナーキスト」と呼ぶ事が出來る。

常に暴動を製作して革命を指圖して居つた彼等は、如何なる人々であつたか。

所謂「アナーキスト」には頗る多樣の要素が包含せられて居つたが、これをブリソーの言葉によつて定義すると、

「秩序紊亂者は、あらゆるもの――財產、慰安、商品の價格、國家に供する種々なる勤勞等――を平均化しやうと欲する人々、立法者の給料丈を小舍の勞働者にも欲し、彼等が所有してゐないが故に、熟練、知識美德さへも平均しやうと欲する人々である。」

その特徴は「法律の施行されぬこと、無力且輕蔑される官憲、罰せられない犯罪、攻擊される財產、犯侵される個人の安全、腐敗した民衆の道德、無憲法、無政府、無主義」等であると。（Kropotokin, op. cit, p. 352.）

彼等は、常にコンベンションの外部に居つた。從つて彼等は政黨ではなかつた。政黨をなすべきものでなかつた。或者はコルデリエー倶樂部の部員であり、或者はジャコバン倶樂部に屬して居つた。彼等の多くは、パリーのコンミューンの周圍に集つたが、其本領はセクション（區）にあり、又巷であつた。彼は街上に出で、又コンベンションに現れては、その廻廊から大聲で一切を指揮するのであつた。然し、その有名さから云へば、全く無名の士ばかりであつたから、革命の情熱の冷却と共に、其聲も次第に薄れて、無名の名にふさはしく、街の軒端に姿をかくす人々であつた。クロポトキンは彼等を目して「全フランスに散在した革命黨であつた」と稱してゐる（ibid, p. 353）。

然らば、彼等は如何なる目標に向つて、民衆と倶に行進したのか。彼等の要求したものは「萬人に土地」即ち「土地均分法」と經濟的平等即ち富の平均であつた。そして、有つ者と有たぬ者との對立に於ける鬪爭が彼等の手段であつた。そのために最も必要なものは、當然、暴動であつた。秩序は彼等の最も好まぬものであつた。彼等は常にこの暴動の先頭に立つたのである。彼等のかゝる態度は、ジロンド黨とは全く尖鋭化した對立をなし、時としてはロベスピエールすらも相容れぬものがあつた。この種の情熱と暴動によつて、彼等をして行くところまで行かしむる時、我々は、そこに宛然社會主義的社會の出現を見るの觀があるのを覺える。一七九三年の共和政時代が正しくそれであつた。

當時、コンベンションは單獨に於ては何事もなし得ぬ存在であつた。非常時に於て、合法性を尊重する團體が何事もなし得ぬ事は自然の理ではあるが、パリーの民衆が蹶起してこれを援助しなかつたならば、倒壞する事は確實な、無氣力な集團にすぎなかつた。こゝに於て、民衆は彼等の占領した革命的コンミューンの中から、周圍から、全フランスに注意するに次の如き斷乎たる意思表示を以つてしたのである。即ち、自由の憩ふ所が國民議會丈であるとき、その自由は實に不安定であり、無氣力である。あらゆるコンミューンは自由のための火焰とならねばならぬと云ふ態度がそれである。ジョレスは、かくの如く革命の體現した、この强力的パリーを評して云ふ。「深い空間の光線の中に現はれる城壘の樣に、この都市の城壁は、兩世界的自由の大きな光の上に描き出された」と。（J. Jaurès, op. cit, Tom I. p. 307）この城壁の上に上つて民衆を指圖する「アナーキスト」は如何なる思想を抱いて居つたか。

七

議會及ジヤコバンと獨立の立場を擁して、常に民衆と倶に立働いたこれらの人々に、我々は共產主義思想が抱懷されてゐるのを見る。

一七九三年及九四年には、各區に、又特に、コルデリエー・クラブには、ジャコバンの論說の如きは、保守的のものであると見て居つた人々があつた。この人々の中に我々は Jacques Roux, Varlet, Dolivier, Boissel, L'angé 等を數える事が出來る。

彼等には、社會問題の共產主義的解決を待望する學說の明瞭なる流があつた。テルミドールは、これらの人々が抱いて居つた希望と見込とをすべて破壞した。そして、其後には、所謂「深く且一般的な平和」とも云ふべき時代が來た。然し、彼等は、尙その夢想を支持して居つた。革命のこの最も沈鬱な時に於てすら、人間の醫し得ぬ樂天主義が尙一切のものを新らしくする準備をしてゐる事を覺知して居つた。彼等は如何にして自己の思想を實現するかといふ考は持たなかつたが、自由放任主義の一切の誤謬を觀取して、事實上の平等を實現したい希望を有して居つた。

我々は、彼等について、餘り多くを知らない。と云ふのは、エベールやショウメット一派の過激派の如く彼等は有名でなかつたから、我々は彼等を知る充分の手がかりを與へられないからである。

ジャク・ルーは、彼等の中でも特記される價値を有してゐる。彼は僧侶であつた。そして、恐らく、メリエーの悲しい著述の中に於て、今尙我々に生きてゐるあの燒ける如き憤怒から革命によつて解放された人であつたろう。ジョレスは、彼について、「極めて數奇な生涯を經てパリーに來た四十才のこの僧侶は大きな野心の目的に漠然と進んで行つた樣に思はれる」と記してゐる。彼は常に貧しかつた。その孤獨の姿に於て、絕えず彼の唯一の友となつたのは、犬であつた。この犬をつれた彼は、パリーの勞働者階級の街々に單純な共產主義を說いて歩いた。そして教會での經驗から推して、婦人こそ決定的の役割を演じうるものであることを知つて居つた彼は、男と話す樣に、婦人達とも、よく話合つた。この際彼が自己の有力な方便として採用したものは、政爭を事としてゐる諸黨派が等閑に附して居つた經濟問題であつた。即ち、「王の首が落ちて以來、彼は常に買占人といふ言葉を口癖にして歩いた」のである。

リヨンにはミシユレが、異常な人物として賞讃したシヤリエが居つた。彼も、其行動や眞の思想の細末を僅かしか我々に知らせてゐない。彼はリヨンに於て商業を始め、ヨーロッパ及東洋に旅行して富有ではなかつたが安易な生活をして居つた。彼がリヨンの溫和主義と反革命とを壓殺したのは、自由に對する愛と貧民に對する大なる憐憫の情とであつた。

ランヂエを發見したのはミシユレであつた。ミシユレは、この都市以上に夢想家の多くゐるところは他になく、又如何なる所に於ても、失望者が、人間の運命の問題について、これ以上心配して新解釋を求めなかつたリヨンの市に於て、この地最初の社會主義者ランヂエを發見した。然し、リシエテンベルヂユは其著「社會主義とフランス革命」の中に於てランヂエの名すら擧げてゐない。

ランヂエは獨逸のケールに生れ、ムンステルで育てられ、十六才の時にパリーへ來たらしいのである。彼は、財產は掠奪であると說いて、ブリッソー以上にすぐれたプルドンの先驅者となり、大フランスの共同主義的組合の觀念を說いて、フーリエ主義の泉に大河の幅を與へた。

ヴァルレーも亦、主要な人物であつた。彼はジャク・ルーと相並んで、經濟問題を最前線に置いたのである。「二十才に滿たなかつたが、活動と自尊の焦躁に蝕まれて居つた」彼は、「まだ被選擧年齡に達してゐなかつたから、議會の外部から、これに對して働きかけやうとした。彼は八月十日以前の一切の暴動に加つたが、次いでチユイラリー

庭の中に露天の演臺を設けて、その上から民衆に向つて咆哮した。議會とコンミューンとを種々な請願で惱ませ、諸區に於て縱横に活動した」。(J. Jaurès, op. cit, Tom VII. p. 36)彼の理論は、一七九三年の初期の小冊子 "Declaration solennelle des droits de l'homme dans l'état social" に示されてゐる。所有權の行使に際して社會の破壞を導かざる事、公共の財産を犯して獲得せられた財産は、其事實が立證されるや否や、國有となる、と云ふのが彼の意見であつた。然し、パリーの勞働者としての彼に就ては、之亦、我々の知るところは甚だ不完全である。

「モーシャン」の司祭ピエール・ドリヴエは、エタンプの住民に代つて革命思想を述べた僧侶の一人であつた。彼は云ふ。生活必需品が貧者の買ひ得ない價格に上る事は、貧者にとつて、食糧品の存在の無を意味する。自然に於て、その最良の部分を持つ者は自然を最もよく豐かならしめたものである。然るに、生れながら相續權をもたぬ多くの人々は、自己の勞働の結果として、パンの缺乏を强制されてゐる。かゝる不幸は共通でなければならぬ。獨り勞働者階級のみが受くべき不幸ではない。政治はかゝる大きな誤を犯してゐる云々と。(J. Jaurès, op. cit, Tom III pp. 351-352)。

彼等は、一樣に、土地所有の制限、强制公債、投機によつて得たる財産の沒收、國民工場、食物供給の公的調節等を要求した。彼等がジャコバン黨と異なるところは、彼等が財産權に對して尊敬を拂つてゐない點にあつた。彼等は危機の重大さをよく了解してゐたから、融和的な手段に贊成しなかつた。そして、富者及遊惰者に於て、私利のために公共の貧困を躊躇なく犧牲にする貧民の敵を認識して居つた。土地均分法の如きは、彼等の當然支持するところであつた。

テルミドールは彼等を失望せしめた。ロベスピエールの失脚は、同時に、劇藥的な經濟的立法に對する彼等の希望の消滅を意味したからである。然し、彼等には、バブーフの實行迄に突き進む傾向はなかつた。彼等は、飽く迄、民主主義的社會を尊敬して居つた。彼等の思想の全體的展望は、一七八九年にボアッセルによつて公刊されたパンフレット、Catéchisme cu genre humaine に於て最もよく行ふことが出來る。ボアッセルは極左のジャコバンの一人であつた。

彼の著述は、一切の害惡の育兒として社會を痛烈に攻擊する事によつて、筆が進められてゐる。財産、結婚、及宗教は、人間最惡の衝動の發表として檢討され、排斥されてゐる。財産は單に壓迫の手段であり、不一致の根元である。貨幣の發明は、只、これを增加したにすぎない。社會の職務は、自然的に正しい我々の眞の本能に報ゆるに存する。若し、我々が、神のみが唯一眞の所有者である事、及我々は、必要の場合を除いては、何者に對しても權利を持つことは不可である事を認めるならば、その事は可能である。我々は教育を改造し、産業を國民化し、完全なる共産主義の誘入の思想を以つて、集産的所有の精神に人を訓練しなければならぬ。ボアッセルは教育制度に期待するところがあつた。

この後、一七九三年に、彼は、地上の成果は自然權によつて貧民に屬する事、財産は、生存物資に對する人間の不可侵權の横奪であるから、暴力によつて取戻しうる事をジャコバンに於て主張した。然し、彼の希望した變化は、如何にして決定的に實行が出來るかと云ふ點に關しては、彼は何等明白な方案を有して居なかつた。ドリヴエと同じく、彼にとつては、社會は、ロシヤのミュールの共産主義にいくらか似た共産主義の條理の上に、又勞働の全收益權の上に改造さるべきものと考へられて居つたのである。

要之、彼等は如何にして彼等の共産主義に到達すべきかを實際に考へなかつた。ラスキーは、クロポトキンと共

に、これらの早期の哲學者の分析は、一八四八年以來の原理の多くを豫期してゐる。フトリエ、オーエン、プルドンによつて精製されたものは、殆んど當時の小冊子及演說又地方的法令の中に見出す事が出來る。彼等は思想は持つて居つたが、方法をもたなかつた丈である」と評してゐる。(Laski, The socialist tradition in French Revolution, p. 23) この點から云へば、バブーフは何人にも優つて、行動と思想とを有つ重要な社會改良家の地位を確保してゐる。

八

かくの如く、民衆は、彼等の革命的獻身に依つて、ジャコバン倶樂部を占領し、パリーのコンミューンを占領した。ジャコバン倶樂部が全フランスに張りつめた指揮權と、パリーのコンミューンの全權限とで尙不充分の場合には、彼等は常に叛亂を採用した。即ち、彼等はあらゆる權力を支配することによつて革命を守り、フランスを守つたのである。殊に、フランスの最大危機に於ては――戰爭――其權力を最も極端に行使した。從つて、恐怖政治の如きも、ロベスピエールの行ふところに非らずして、寧ろ彼等のこの活動の發表であつた。彼等は、これによつて、一切の反抗、一切の裏切のみでなく、それらの可能性すらも、蕾の間から刈り取つた。そして、外敵、內敵に對する革命的信念を一層强固にするための絕大の壓力を釀成したのである。

さりながら其反面に於て、戰爭は、當時急速に發展しつゝあつた資本主義的經濟の影響を一層强く彼等の上に加へることを容赦しなかつた。これが、生活其のものに對する革命の壓迫となつて現れたのである。これに對して、彼等は、無產階級の自覺的要求と同一の形式と手段とを援用して、この壓迫を押戻したのである。徵發、生活必需品の價格決定、其他の强制手段を要求し、實施せしめたのはこのためなのである。

彼等がこの要求を貫徹するためには、勿論反亂が必要であつた。そして又それが決定的の有效さをもつて居つた。從つて、その反亂は舊制度に對するそれとは全く趣を異にしたそれであり、殊に買占に依る物價騰貴のために生活が脅かされる時、屢々見ることが出來た。一七九二年の砂糖の騷亂、及一七九三年の石鹼とパンの暴動の如きはその一つである。

前者について見るに、砂糖の價格の騰貴は牛乳入りの珈琲で朝飯を執る習慣を有つて居つた勞働者の家政費を著しく增加せしめた。勞働者は、教會が買占人によつて買取られて、倉庫となり、そこへ珈琲や砂糖がかつぎ込まれるのを見て激怒を覺えた。かくして騷亂が生じたのであるが、この騷亂が、これらの投機が商業競爭と私有財產とから生ずる不可避的結果であると云ふ民衆の社會組織的分析の結果でなかつた事は勿論である。その目的は、財產が生む過度の不秩序を匡正しやうとしたにすぎないのである。

一七九三年二月二十五日の石鹼とパンの蜂起は、朝の九時から十時迄の間に多くの大通で始められた。これについては、この事件の指導者と目されてゐるジャク・ルーが、「食糧品屋は市民が長い間甚だ高く彼に支拂はされて居つたものを、市民に返還したにすぎなかつた」と云つてゐる。ジョレスは、この擧を七月十四日及八月四日、又王を打つた八月十日以後富者を擊つ第三番目の革命であつたと評してゐるが、その重要性は、革命意識の中に目覺め始めたところの生存と云ふ深刻な本能に急に一層の力を與へたことにあつたのである。投機業者、仲買人、請負師等の搾取者の所罰要求、及そのための暴動、經濟生活に對する强制的干涉、すべては同種同型のものであつた。

カウツキーは一七九三年時代の革命の狂激を次の如く說明してゐる。曰く「搾取は水蛇の如く、其頭は多く切れば切る程それ丈多く生え代つた。その水蛇を追躡して、サンキュロットは益々深みへはまり込んで行つた。彼等

は革命を永久的と宣言せざるを得ず、その適用が彼等に對し、既に戰時狀態を不可避ならしめて居た恐怖政治をば搾取に對する彼等の鬪爭の結果として、生産形態の要望に對し他階級の利益に對して彼等の立論が喰ひ違つて行けば行く程、益々、尖鋭化せざるを得なかつた」と。（宗道太譯、カウツキー、フランス革命時代の階級對立、七五頁）

併して、民衆がともすると實行に訴へたこれらの諸要求が決して當時の社會の恆常的要求でなかつた事は、平和がすべてを忽ちの中に解消せしめたことで明かであつた。フランスの外國に對する勝利は、彼等によつて保持された威嚇狀態を不必要にした。秩序は「秩序の反亂者」を全く必要としないのみならず、それは秩序に伴ふ經濟的躍進の障害でもあつた。エベール、ショーメットの沒落、コンミューンの顚落、ロベスピエールの最後、すべてはこれを現實として我々に物語つてゐる。革命の勇士は散り急ぐ秋の木の葉の如く、劇の果てた劇場の灯の一つ一つ消えて行く如く――これはカーライルの古典めいた表現である――終を急いだのである。民衆の獲物執る手は疲れを見せた。巷を走り歩るく彼等の踵も堅く重くなつて、無名の士も有名の士の如く一人宛或は斬首され、或は彼等の舊の穴へ潛り込でんだのである。

暴動は最早無用になつたのである。革命は完成したのである。然し、無産階級の革命が完成して、叛亂の士が解消したのではなかつた。彼等は自己の階級のためではなく、他の階級のためのみに働いた敢爲俠心の徒であつた。サンキュロットはその使命を果して、安堵して解體した。そして、完成された資本主義經濟社會の天地に於て、忠實なる勞働者、農民として自己の生活を開始したのである。然し、それ以後の彼等の生活は、やがて來る日の自己のための自己の革命の長い準備の形貌であつた。果して然らば、フランス革命中のあらゆる擾亂は資本主義社會の生みの叫びであつたと解すべきであらう。

九

思ふに、群衆が一つの强力な勢力となつて出現するには、それに有利な條件が存在しなければならぬ。若し、群衆によき條件が與へられたならば、群衆は甚だ優勢な勢力を社會に振ふに至る。この意味に於て、フランス革命は群衆の歷史に一線を劃するものであつた。その有利な條件とは何か。（新明正道著　群集社會學　一六頁）。

それは、一言にして云へば、フランス革命を惹起した十八世紀に於ける經濟力の發達である。そして、その經濟力の代表者である第三階級は賢明にも、この革命を達成するために最も明白にして、最も强烈な標語、曰く平等、曰く自由の標語を掲げた。

法律の前には萬人は平等である。各人は平等に價値評價さるべきである。各人はあらゆる集會に、あらゆる職業にあらゆる政治に參加する權利をもつ。かくの如き主義は各人の心の裡にあらゆる機會を捕捉して行動せんとする欲求を喚起して止まないものがある。加之、革命時に於ては、指導者は機會によつて、不意に且つ容易に生ずる。偶然演壇に馳け上つて忽ち群衆を率ゆるものにデムランがある。大聲なるが故に叱咤して指導者となり、大立物になつたミラボーがある。

かくて、革命に於ける民衆は、嘗つて經驗しなかつた程の活潑な政治的活動を示し、その結果目的を獲得するために結合することの重要性を認知したのである。この運動に於て、彼等は何等明確なる階級意識を持たなかつたことは既述した如くであるが、その集合性の威力を無産階級に知らしめた事に於ては偉大なる歷史的價値を有するものであると云はねばならぬ。